I—3　言語の自然、自然の言語

中西　進

私どもが言葉というものを考えますときに、その中にしばしば自然が含まれていることがございます。たとえば、花が咲くと申しますが、一方、幸せなことを「さきわい」を申します。そのさきというのは、花が咲くことの咲くと同じ言葉であります。

あるいは、人生の盛りと申します。そのさかというのは、花が咲くということでありまして、人間が幸せだと感じたときには、からだの中に花が一杯咲いていることになるわけであります。

こういうふうに、言葉は自然を含んでおりますし、また、逆に自然を見ましても、その中にさまざまな言葉が隠されている場合がございます。東山は、布団を着て寝た姿だという言葉を持っています。そういう自然と言葉という二つのものが、密接不可分に結び付いている状態に近ごろ私は関心がございまして、そのことを少しお話してみたい、そう思ったわけでございます。

素材はたくさんありますので絞りまして、水について考えてみたい。水が空から降りますと雨と申しますけれども、雨について話をしてみようと考えました。私どもは天上のことをあめと申します。かと思うと、今申しましたように、天から降る水のこともあめと申します。あるいは、海のことも、古くはあまと申しました。あまはあめと同じでありますから、海もあめであり、空もあめであり、降る水もあめである。というのは一体どういうことなのか、ということが、今日の、たった一つの話題でございます。

空と今申しましたけれども、空と天とは、古い言葉遣いでは違っております。私どものすぐ頭上にあるところは、空でありまして、あめではございません。あめというのは、もっと、それよりも遥か彼方のところを言ったように、古い文献を調べておりますと思われます。つまり、すぐ真上のところは空でありまして、そらというのは、そらごと申しますように何もないということであります。そのもう少し遠いところに、あめ、あまと呼ばれる充実した世界がある、そう考えたようであります。

そこから落ちて来るものが、あめ（雨）。あめ（天）と同じでありますので、あめというものは、一体どういうふうに考えていたのであろうかと考えますと、唐突でありますけれども、ケルトと呼ばれる人々が、かつて、ヨーロッパに広く分布しておりました。紀元前五世紀から一世紀ごろ、中央あるいは西部ヨーロッパの辺りにケルト人がいたのでありますけれどもケルト人の考え方によりますと、雨というものは、男女の結合であると考えているようであります。

男が、天、雲、こういったものの支配者であり、女性が、大地、豊穫、実り、そういうものの支配者である、その男女の結合が雨だというふうにケルト人は考えているようであります。これは、単純に申しますと、雨が降って穀物が実る意味で、両者が結合すると考えられますけれども、ただ単に雨が降ることによって穀物が豊かになったり、大地が固くなったりということでありませんで、それを男女にたとえて、結合するんだというふうに考えたところに大きな意味があるように思います。

日本語では、結合することを結ぶと申します。日本語で結ぶというのは、むすというのにぶがついた言葉でありまして、むすというのは、

苔むすというむすで、生える、新たなものがそこに生じることであります。われわれは、息子であり、娘でありまして、新たに生じた苔のような存在だということになります。

そして、また、結びの神等と申しますと、これは生産の神であります。高御産巣日の神、神産巣日の神と申します。つまり、結ぶという日本語の概念は、ただ単に、二つのものが一つになるということではありませんで、そこに新たなものが生じるということであります。それを結ぶという日本語で表現いたしました。ただ、手を結ぶということではありませんで、手を結ぶことによって、新たな生命が生じるわけであります。

これは、たとえば、草を結んで無事を祈るとか、松の枝を結んで無事を祈るとかいうのと同じでありまして、結ぶことによってそこに生ずる生命、それを期待するという呪的な行為であります。それが、男女の結合であって、それになぞらえたものが雨ではないかと思うわけであります。

今申しておりますような、ケルト人の考え方と似たような考え方は、日本人の中では、雷についていえます。昔は、稲妻のことをいなつるびと申しました。いなというのは稲であります。つるぶというのは、男女が交わることであります。いなつるびというのは、日本書紀に出てまいりますが、いなづまというのは古今集から後に出てまいります。

自然現象と神的なもの

いなづまという、あの光を、なぜいなづまというのかというと、あれは、稲の相手だという意味であります。つまり、あの光が当たると、稲がよく実る、そこで稲の相手というので稲妻というのであります。科学的にも、いなびかりは、窒素だそうであります。事実、窒素肥料として稲の豊穫をもたらすという科学的な証明もできるのでありまして、最近は、茸に光を当てて栽培をするということをやっております。それを、日本人は日本書紀の段階から知っていたことになります。

こういう事柄を、つるぶという、男女の結合として考えることが、今同じような考え方として、私の念頭に上がって来ます。ほかに、雷のことは、かむとけ、かみとけ、かみときとも申します。これは神様がとけるという意味でありまして、本来あまと呼ばれる空間にあった神様が、解けるわけであります。これは別の言葉で申せば、電気が放電するわけであります。その電気の放電を、一二〇〇年前に日本人はかむとけという言葉で言い当てているのであります。

そういうことを考えますと、あめというところにある恐らく神的なものが地上に降りて来る、そのことによって、稲の新たな生命が芽生えるということでしょうけれども、それは、稲だけではありませんで、人間でも同じでありまして、雷を祖先とする人々の伝説がいろいろございます。

たとえば、この京都では、加茂神社の縁起の丹塗矢となって流れて来た男性が、玉依姫という女性と結婚をして雷のこどもをうむという話がございます。後にこれを、火の雷（ほいかづち）と名づける、そして、出来たこどもは別雷（わけ）という名前を与えまして、おまえは祖先の国へ帰れといったら、天井を突き抜けて帰って行ったというのです。

この玉依姫のお父さんは建角身命と申しまして、角を持った猛々しいからだの神様であります。具体的な神格として竜をイメージしていたのだろうと思います。この、竜と雷と剣といったものが一体となって神話あるいは伝説の中で登場する傾向もたくさんございまして、有名なのは、例の天叢雲の剣は八俣の大蛇から出てきて、おろちから剣が登場するということであります。そして、その剣は、しばしば雷と一緒に考えられるわけであります。

その、蛇と刀は共通性がございます。これがしばしば結婚譚等に用いられたりしますのは、男性の象徴だからです。しかし、そうなると、いかづちが、なぜイコールになるのか、若いころの私には分かりにくく思われました。しかし、今申しましたようにいかづちが天から下ってきて、物に生命を与えるということになりますと、これは、やはり男性としていかづちを考えるということでありまして、その生産力において、剣とか、蛇、またいかづちといったものが、一定のシンボルとなり、話の中で共通したイメージを持って語られる、こういうことになるのだろうと思われます。

そういう生産するものとして、いかづち、あるいはそれにともなう雨を考えているのでありますけれども、これは、ケルトとか、日本だけのことではありませんで、アメリカインディアンの話の中にも、同じようなものが出て来るようであります。

オマハ族、これは中部アメリカのインディアンでありますけれども、オマハ族の持っている「雷の歌」というものがございまして、これは「天の高みに住むわれらの祖父よ」、そういうことを歌いまして、これは、やはり祖先が雷であることを唄う歌であります。このオマハ族は、みずからの髪を切って天に捧げますけれども、この髪を切るということは、はからずも、さっきの天叢雲の剣をとり出した須佐之男命をまた思い出します。須佐之男命は天上を追放になりますけれども、そのときに爪を切り、髪の毛を切って、追放になったと語られております。天照大神に散々悪さをいたしまして、追放になる。その追放になるときに、髪や爪を切って追放になったというと、爪とか、髪、ひげというものは伸びるものでありますから、これは生命の象徴であります。

そこで、呪術的に申せば、模倣呪術として生命を断って須佐之男を追放したと、神話は語ります。

こういう呪的な信仰は、何千年も生き続けるのが普通でありまして、今でも指を詰めて詫びるなどということがございます。

そういうものが、インディアンの中にも共通して考えられますけれども、この須佐之男という人物が、大変おもしろくて、「八拳須、心前に至まで啼伊佐知伎」と書いてございまして、拳を八つ並べたぐらい、ひげがはえるまで泣きわめいていたということであります。泣く神様、なぜ須佐之男が泣かなければいけないのかというと、須佐之男命はレイン・シャーマンだろうということをよく申します。雨を呼ぶシャーマンだったのではないかということであります。

雨降ると天降る

つまり、泣くということは、今申しましたように模擬呪術であります。泣くことによって、雨を呼ぶことが出来る、こういうことを考え

るわけであります。日本書紀で須佐之男の描写の一部に、蓑笠を着て、濡れそぼちながら、追放の旅を続ける、どこの家にもいれてもらえないで旅を続けるという、ブラッカー先生のお話では異人が接待されない姿で登場したりしますけれども、それも、やはり自らが雨の悪を代表するような出で立ちとして語られています。それが須佐之男という神様の描写だろうと思われますが、これもまた、雨を呼ぶことにかかわる話題でございます。

ネイリー・ナウマンという考古学者が収集しております、土偶の中に、落涙型の土偶というのがございます。日本でも、長野県の井戸尻遺跡などから出ている土偶もそうでありますけれども、目の下に刻み目が入っているものです。これは、涙をあらわすだろうといわれておりますが、そういうものが中国にもアメリカにもメソポタミアにもあります。こういう土偶も、たとえば須佐之男が持って、神に祈るというようなことがあったのだろうと思われます。

これは慶応大学にあるのだそうですけれども、秋田県の内岱遺跡から出土したという小さな、一〇・三センチの有孔石板がありまして、そこにギザギザの、かくかくとした印がついているんですね。点々と雨垂れのような格好でついております。ギザギザになって、まるで雷がぴかぴかと光る雷の紋、雷紋のような格好で刻みがある。そういう石板があります。恐らくこれなども、レイン・シャーマンが持って祈る、そういったときの道具だったのではないだろうか、そういうふうに考えられます。

こんなふうに実りをもたらす雨が天上にあって、落ちて来るそのものも、同じ言葉のあめという言葉で呼んだのだというふうになりますと、どうやら日本人が考えた、少なくとも日本語を辿って考えられる範囲におきましては、空という空間の、さらに奥の遠いところ、あめと呼ぶ空間は、聖なる生命水をたたえた水域だったのであろうと考えられます。

そこから水が落ちてきますと、それが雨だということになるのだと思われます。万葉集でも、月の船等というのがありまして、月が船にたとえられているわけであります。船のイメージが、詩的な表現として天上に移行して、そこで、月を船に見立てて、月の船というのだろうと申すのでありますけれども、そうではありませんで、海そのもの、水域そのものが天上にあったのだというふうに、考えたほうがよさそうであります。

また、饒速日の命という人は、天の鳥船、天の磐船という船に乗って、地上にやってまいります。ほかの国の伝説ですと、たとえば、太陽は車に乗っています。そういう車ではなくて、船に乗って来るという考え方の中に、あめは水域だったという古代人の考えが見えるのではないかと思うのであります。

この雨が降ることに関しまして、雨のことを神の仕業と考える、そういう考え方は既に出ております。書いたものを拝見して、私が大変いつも感銘いたします学者の一人に、泉井久之助さんという方がおられますけれども、泉井久之助さんが、ゼウスが雨を降らせるというホメロスの言葉がある、それと同じようなものが、たとえば、英語のHrains という言葉になるのではないか、と言っておられまして、こ

れは非常に優れた着眼だと感銘いたします。

それと同じようなことが、やはり中国語にもあって、天雨と書いたときには、天が雨を降らせるという意味だという解釈を読んだことがございます。天候が雨だということではなくて、天が雨を降らせるというのが、天雨という表現だという解釈です。これなんかも同じでありまして、日本語の雨というのも、天の水が落ちるという、あるいは、そこに神格を想定すれば、その神の行為によって天の雨が落ちて来る、こういうことになるのだろうと思います。

ただ、言葉遣いとしては、雨が降るというときには、雨が落ちて来るというのでありまして、神が雨を降らせるという他動詞で表現しているのではないと思います。そうしますと、雨が天上そのものならば、落ちてきます雨は、天そのものが、粒々になって落ちて来ることになります。そういうことを雨が降ると言ったんだということになります。雨降るというときには、天降ると考えてよろしいということではないでしょうか。

ほかの言葉に「あもり」という言葉がございます。これは、「あまおり」が詰まって、「あもり」になるというのですね。もるというのは降りることで、このあもるなども天が降りて来るということをいうのだろうと思います。

そういう天が大変遠いところにありますので、そこまでの距離をひさかたと申します。ひさかたの天という言葉が、古典にしばしば出て来ることは、皆さんもご承知だろうと思いますけれども、「ひさかたの」というのは、「久しい彼方の」という意味だろうと思います。これは、ひさご型、瓢箪型のという意見もあるのですが、そうではなくて、遠い彼方の、という意味だと思います。

そうしますと、遠い彼方の空だから、ひさかたの天でよろしいということになるのですが、待てよと考えますと、ひさしいというのは時間の概念であります。距離の概念ではありません。だから、ひさしい彼方の天といったときには、そこに一種の矛盾があるようです。けれども、われわれでも、たとえば距離を測るときに、何億光年というふうな、時間の概念で距離を測ることをしております。そういう時間の概念を持って空間を測る、その第一号が、ひさかたのという言葉であります。

水から誕生する神々

こんなようなことが、雨が天であるということから考えられることがありますけれども、さて、もう一つ、海をあまと申しました。海人をあまとも申しますが、これはあまひとの略だという意見がよいでしょう。そこで、これは一体どういうことになるのかということが、次の話題であります。海というのは、四方に広がっているところでありますが、今までの話は、頭上の世界のことでありました。それに対して、海というのは、水平の彼方のところにありますから、縦と横の関係にあるわけです。

さて、海を、いま話題にいたしますについて、ヨーロッパの概念に、宇宙水という考え方があります。どういうものか申しますと、リトアニアの考古学者であります、マリア・ギンタブスの言うところに

よりますと、古代ヨーロッパ――古代ヨーロッパというのは、紀元前六五〇〇年から三五〇〇年のころの間のことと定義するようでありますけれども、その、古代ヨーロッパの図像学の成果を持って、彼女の言うところによりますと、先史人たちは、地上や空、雲の彼方に根元的水域があったと考えていたといいます。

そして、そこに蛇の女神や鳥の女神たちが浮遊しているのだというのであります。天上や空の彼方に根元世界を考えれば、そこにいるものは、鳥の女神でありましょうし、また、これが水であるならば、そこには蛇の女神が浮遊しているのだろうと思います。そういうことを図像を通して彼女は考えます。また、水底深い渦巻の中に、冥宮があって、冥宮の中に女神が住んでいると申します。その水の中から、神々が誕生するわけであります。

この、水からの誕生というのは、ビーナスもそうでありますから、ごく理解しやすいところでありますけれども、彼女は土偶とか、水を入れる容器の紋様とかから、こうした思考を類推いたします。

その紋様の一つが、さっき申しました雨の紋様であります。それから、雷紋、卍印のようなものが一面に書かれますけれども、これは女神のシンボルであろうといいます。雷紋は、天上の女神のシンボルであります。

あるいは、渦巻紋様がたくさん出てまいりますけれども、渦巻紋様に関しましても、これは、水底にある冥宮をイメージしたものではないかということを、優れた研究者であります鶴岡真弓さんが、ケルトの紋様として言っておられまして、これも納得できます。

つまり、ギンタブスや鶴岡さんの考え方にあらわれておりますように、ケルトにしましても、さらにそれに先立つ古代ヨーロッパ人におきましても、天上にも地上にも水が満ち満ちていて、そういう水を宇宙水と名づけている、そういう形跡がグローバルにあるのであります。

今申しましたのは、古い時代の話でありますが、現代の話になりましても、アメリカインディアンのナバホ族の神話の中に――ナバホは、南西アメリカのインディアンでありますけれども――自分たちの周囲の遠くは海である。東にも海がある、南にも海があるというふうに四方の海をもって宇宙を考えているようであります。

太古において、全てが水であったという考え方は、枚挙にいとまないくらいたくさん出て来る神話の語り口だろうと思います。

たとえば、インドでもそのようでありますし、リグベーダーの中などでも、太初宇宙は水であり創造神は太初の原水からうまれたということが語られておりますし、ブラーフマナにも太初宇宙は水であったとあります。アフリカにはドゴン族という一族がおりまして――ニジェール河近く、マリの辺りのドゴン族の神話の中にも、大変おもしろい、原初の水の物語が出てまいります。

一番最初に、アンマという神様がいるのですけれども、そのアンマが、ノンモという神様を生みます。この、ノンモというのは、実は、実体はなまずです。ノンモという言葉はどういう意味かというと、「飲ませるもの」という意味だと解かれています。何を飲ませるのかというと、生命力を飲ませるのです。そういう意味の神が、最初に登場する。なまずでありますから、根元の生物は水の中に住んでいるの

であります。

つまり、ドゴン族でも、原初は海であり、宇宙は水から始まるということになります。そして今のは神の世界でありますけれど、これが少したったのちの、人間の世界になりますと、太陽が生まれ、雨が生まれ、それから池が生まれ、そこにおいて、一つの天地の創造が終わったと考えます。さっきの話にかかわりますけれども、これも雨と太陽と地上の水、そういうものにおいて、彼らのコスモロジーが存在することになるのであります。

宇宙の原初としての水

さて、グローバルに存在いたします宇宙水というのは、日本ではどうなのかということになりますと、日本でも、それに類似するものがあるように思われます。

日本書紀の冒頭に、国土がまだ若くて浮き漂っていて、「遊べる魚の、水の上に浮かべるがごとし」と書いてあります。そして、天地の中に一つのものが生まれます。形はあしかびのごとくであって、即ち神となる。そうやって、最初の神様が登場するのであります。ですから、この神の誕生の仕方は、全体が混沌とした水のような状態、浮かび漂っておりまして、水の上に魚が遊んでるみたいだった、というのでありますから、これも水のイメージであります。その水の中から神様が誕生したというのが、日本書紀の、最初の神の誕生の語り口であります。

もっとも、その前に少し文飾がついておりまして、天地が混沌としていて、まるで卵だったと書いてあります。これは、宇宙卵の思想で、その系統の神話でありますが、これは中国からの借り物であります。三五暦記とか、淮南子とかいう書物の中に書いてあることを、そのまま書いていますから、中国の考え方としましても、混沌という、さんずいをもって語られるような、宇宙観が最初にあったということになります。

さらに、もう少し借り物のところを読んでまいりますと、「溟涬にして牙を含めり」と書いてありますが、その、ほのかというのも水のイメージであります。そして、清陽なるものが上がりて天となった。重く濁ったものが、淹滞りて土となった。こういうふうに天地が剖判するのであります。

そのところにも、さんずいの言葉が出てまいりますし、すべて水のイメージで語り始めています。

そういうところから考えましても、日本書紀の冒頭は、どうも原初は水であったという考え方をあらわしているように思います。いままでの研究では、この神話を取り上げまして、国生み神話は海人族の神話であろうと考えたわけですね。それに対して、今私は異論を唱えています。そうではなくて、もっともっと根元的な宇宙水に観念があったのだろう、その中から発想されているのだろう、そういう考えであります。

もう一つ、大変おもしろい神話が古事記の中にあります。速秋津日子と速秋津比売という二人の神様が、次々と神様を生みます。そのうちの一人として水分の神という神様が生まれています。水分というの

は、山の分水嶺であります。その分水嶺の神様の弟分として、くひざもちの神が生まれたと書いてあります。このくひざもちの神とは何か、本居宣長が、くみひさごもちの神だろうと言いました。くみひさご、水をくむひさご、瓢簞ですね。ひさごをもった神様だろうと言ったわけです。そこまでで従来の研究は留まっているわけでありますけれども、それでは、そのひさごを持って何をするのかといいますと、これは、水分の山のてっぺんにいる神様で、要するに、ひさごを持って水を汲んで川に流すのですね。それじゃ、水はどこから汲むのかと申しますと、遥か彼方のあまの水、宇宙水といったものから水を汲んで流す、その水が川を流れて到達すれば、海が出来る、というふうに古代人は宇宙を考えたようであります。そういうものの一つのあらわれが、くひざもちの神という神の名前になって登場しているのだろうと思います。

そういうところから考えますと、日本の古代人の認識の中にも宇宙水というものがあって、身近なところに海、その果てにあまと呼ばれる水域がある、それは、天上にあるあまとも同じものである、というふうに考えたのであろうと思われるのであります。うみとあまは、そらとあまとの関係と同じでありましょう。

そういう宇宙水というものが存在して、そこから神々が誕生してくる、あるいは全ての生物が宇宙水によって誕生せしめられると考えますと、銅鐸等に、しばし流水紋が出てまいりますのも、永遠の生命を祈った水の紋様だろうと思われます。水は生命の根元であっただろうと考えるわけであります。

古代では泉を女性が管理していました。これも泉が生命の根元として女性と結びつけられたからではないでしょうか。

そういう考え方を、再び言葉に戻しますと、われわれの言葉の中には、みず何々という言葉がたくさんございます、瑞穂であるとか、瑞枝、水茎、神社の周りの垣根のことを瑞垣と申します。

これらは、みずみずしいということにおいて褒め言葉です。「豊葦原の瑞穂の国」も今浮かんでまいります。つまり、これらの言葉は、ただ単に、水分を含んでいるというのではなくて、生命の根元であるところの水、生命水と申しましょうか、宇宙に満ち満ちている生命の根元である水を持った稲穂、生命水を持った垣根、そういう意味だろう。生命水を付与されたもの、そういう意味において、大変神聖なものになるのではないかと思うのであります。

そして、われわれは、肉体を失うことを死ぬと申します。この死ぬというのは、植物がしなえるという、しなというのと同じ言葉であります。つまり、われわれにとって、死ぬというのは、生命が断絶することではなくて、水が乏しくなること、しなえてしまうこと、これが死ぬことであります。つまり生命水の付与が少なくなることが死ぬことでありましょう。

そして、やがて植物は、枯れます。枯れるというのは、離れるという意味であります。これも従来は、魂が肉体を離れる、だから枯れるのだ、それが、生物が枯れるのに対応する、そう考えてきたわけでありますが、どうもそうではなくて、やはり離れていくのは生命水、神から付与された生命水が離れていく、そのことにおいて植物は枯れる、

肉体も枯れる、その前の階段がしなえる段階ですね、死ぬという段階になるということではないか、という気がいたします。

そういう自然の生命水の付与によって、コントロールされているのがわれわれのからだでありまして、決して人間の意思とか、物理的な力とかいうものによって、生命が保たれている、生まれたり死んだりするものではない、というふうに考えなければいけません。

ところでそういう、生と死の親近感と申しますか、断絶ではないという考え方、これもまた、ケルトの生命観と似ているように思います。ケルトの人たちは、死後の世界は暗黒の世界ではなくて、常若の世界だ、永遠に若い世界だと考えているようであります。他界とこの世は自由に霊魂が行き来しまして、非常に密接な、断絶した世界ではないといいます。そのあり方も、今のような考え方と共通するものではないかと考えます。

物と象徴の等価性

以上のように、稲つるびという言葉とかあめとか、今の死ぬとか枯れるとかを考えますと、こういう日本人の言語に込められた認識の中に、人間と自然がいかに親しいか、がわかります。言葉というのは認識の現れでありますから、人間と自然の親しさを証明するような形で、言葉が生まれております。

こうした人間と自然の親しさを表明するような言葉、あるいは、言葉の中に自然が込められているような言語のあり方は、どういう本質を持っているのだろうかということを考えますと、またしても私は、アメリカインディアンの考え方が、それに大変近いような気がするわけであります。特に最近は、金関寿夫さんが繰り返しアメリカインディアンのこういう認識の仕方を、詩を通して語っておられます。たとえば、さっきと同じような、南西部のアメリカに住んでいるメスカレロ・アパッチ族においては、物と象徴が、等価性を持っている、ということを言われます。

たとえば、七面鳥が羽ばたくと夜が明けるという詩がありますが、そのときに、夜という物を七面鳥が羽ばたくように、夜が明けると比喩するのではなくて、羽ばたくと夜が明けるということにおいて、七面鳥という象徴と、夜という物が等価でなければならないということをいっておられます。

正にその通りでありまして、「ぬばたまの夜」等というふうにいいますと、ぬばたまという、黒いからすおうぎの実と、夜というものが等価であるという言語操作を古代日本人もするのであります。

あるいはまた、同じ南西部アメリカのホーピー族等でも、自然を生き物として、人間と同じように見るという報告をベンジャミン・ウォルフがしておりまして、人間にだけしかつけない接尾語を生き物にもつける。たとえば、「あの人たち」というたちを、木や草につけるということですね。同じであります。あるいは、言葉が神様をつくるという考え方も、グローバルにあるとおもいますが、エスキモーの中にもそういう考え方があるとデンマークの探険家ラスムーセンは言っておりますし、さっき申しました、ドゴン族の中にもそういう考え方があります。

ドゴン族は、大変驚異的な神話を持っておりまして、さっきの宇宙の創造の話でありますけれども、まず、宇宙卵の上に記号をかく、そのことから天地が始まるのだという、徹底して言葉にこだわった神話を伝えております。

最初に出来る穀物の種は、言葉にほかならない。言葉を宿して穀物の種が出来あがるということもいいますし、全てにおいて、言語を根元に考えているようであります。そして、人間が誕生すると同時に内部にあった言葉が、外に出て人間の三つの持ち物の一つになります。そして時空の画定と同時に外在化するというのでありまして、言葉を連ねることによって、物の関係が出来上がると申します。つまり、言葉というのは万物の根源力をもつと同時に、順序を整える、整序力を持っていると考えるわけであります。

自己と自然の一致

こういう考え方と共通する、言語の考え方を日本人も持っていたと言えると思います。本来日本人は、あめという言葉だけを取り上げましても、言葉によって宇宙構造を理解していたと思います。つまり、天と空から降るものと、それから海と、そういうものをあめ、あま、という同一の言葉で呼ぶべき、同一の存在として認識するということがら一つを取り上げてみましても、古代日本人のコスモロジーが、言葉の中にはっきりと描きだされるのではないかと思います。

こういうコスモロジーは、やはり、ケルト的だと考えざるを得ません。おおまかな話で、ディテールにおいては違いがたくんありますけれども、ギリシャにおける人間主義、人文主義ですね。そういうものに対してケルトの持っているもっと有機的な生命観、有機的な自然観が、今申し上げたようなものと共通するのではないかと思います。

これは時代が随分さがりますれども、アマーギンの詩という、一〇世紀のドルイドの語っていた詩は、「われは、海の上を吹き渡る風なり」というのから始まりまして、われは蛙であるとか、われは太陽であるとか、ずっとそういうことを繰り返します。自己はイコール宇宙だということであります。私は風である、私は太陽である、そういう言い方ですね。そういう点を重ねていくわけでありますから、自己がイコール大宇宙、大自然でありまして、自己は、宇宙的な自己というふうに名づけることが出来る。そういう自己と自然との一致が、ケルトの中にもあるのではないかと思うわけであります。

一〇世紀のケルトですから、随分キリスト教的に変形されていることはもちろんであります。ですけれども、なおそういうドルイドの呪言のようなものを通して、残り続ける古代的なもの、それが、今私が話題にいたしましたような、日本ではいつか忘れてしまったような、古代的な認識と結び付いているものではないか。

われわれは、とかくケルトなどを忘れがちでありますけれども、もう少し復権したらいいのではないかと考えます。キャンベルという神話学者が言うのでありますけれども、今申し上げましたような、アイルランドに残っているケルトの考え方は、同じようにインドのウパニシャッドにもあるというんですね。インド、ヨーロッパ語族の東と西の果てに同じようなものがある。それが大変驚きであるということを

キャンベルは言うわけでありますけれども、それに対してわれわれは、異議を申し立てることが出来ると思うのです。東はインドではない、ユーラシヤ大陸の東の日本と、それからアイルランドにある。そういうふうに、彼に異議申立てをしなければいけないと思うわけであります。

そういう言語の持っているコスモスの中に身を委ねて、言語というものを考えていくことを、今しきりに私は考えております。これをもって私の話を終わります。ご清聴ありがとうございました。